
短編集『ぬかにクギは打てない』

ジェイのすけ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

短編集『ぬかにクギは打てない』

【Nコード】

N1808E

【作者名】

ジェイのすけ

【あらすじ】

ぬかにクギなんか打てるの？ だってさ、このぬか床の中に、錆びたクギが入っているよ。

茄子のぬか漬けの色を良くするために入れた釘は、決して打ち付けるためにぬか床入れたのではないでありんす。ほら、「人間いたるところに青山あり」なんて言うじゃございませんか。そんな事は分かつちやいるけど、理想の場所へ行き着かないと死んでも死に切れないのかい？ いっち肩の力を抜いて生きてみるのもようござん

しよ。遊び心を忘れた旅路はつらいだけでござんすよ。

『凶悪のセオリー』

『凶悪のセオリー』

「ただいまあ」

ユウジは学校から帰ると、玄関先で、すぐさま郵便受けを確かめた。

「やっぱりないか……」

彼は、空っぽの郵便受けの中身を見て、うな垂れながら残念そうにつぶやく。

すると、ユウジの兄タカノリが、ニコニコしながらユウジを出迎えた。

「おっ！ お帰りユウジ。……おい、どうしたんだ？ 郵便受けなんか覗いっちゃって」

「うん……。クラスの友達ゆいなの柚依菜ちゃんから、誕生日プレゼントが届いてないかなあって確認したんだ」

「そうかあ、朝からずっと家にいるけど郵便なんて何も届いてなかったぞ。しかし、今どきプレゼントを郵便で送る女の子なんているのか？」

「おかしいなあ、柚依菜ちゃん、ボクの誕生日にクッキーを焼いて送ってくれるっていったんだけどなあ」

そうか……と、タカノリは神妙な顔つきで答える。そして熱い眼差しで見つめながら、

「泣くな弟よ。しかし残念だったな。でもお前はまだ中学生だ。まだまだチャンスはいくらでもある。兄ちゃんは陰ながら応援するぞ！」

兄タカノリはそういつて、ガツクリとうな垂れている弟を元気付けた。

すると、弟ユウジはその言葉に感動し、子犬のように瞳を潤ませながら、

「兄ちゃん！」

「ユウジ！」

二人は玄関で涙ながらに抱き合った。まさに熱い兄弟愛である。その時、ユウジは思った。兄ちゃんからいい匂いがする　と。

兄タカノリは、より熱い眼差しを向けて言った。

「どうせそんな薄情な女の焼いたクツキーなんてマズイに決まってるよ」

すると、

「……そ、そうだね。あ、あ、あんな薄情でぺったんこな女の焼いたクツキーなんてマズイに決まってるよね」

ユウジもやけくそになって、兄の暴言に呼応する。

「そうだとも！　そんな女の事は忘れる。さあ叫べ、あの夕日に向かって！」

「分かったよ、兄ちゃん！」

二人は玄関から覗く赤いものに向かって、腹の底から熱く込みあがってくるものを吐き出すように、

「柚依菜の、バツキヤローツ！」

「柚依菜のぺったんこーっ！」

と、やったものだ。その二人の怒声は、家々が建ち並ぶ密集地帯を、ことごとく揺るがすほどのものであった。

そして、熱い眼差しをした兄弟たちは、それを言い切った後も余韻を楽しむかのように、玄関先で立ち尽くしている。

「あースッキリした。兄ちゃんありがとう！」

「いや、礼には及ばん。俺は兄として当然の事をしたまでさ。分かるか弟よ！」

ヒシッ……そう聞こえるほどの勢いで、再び兄弟は抱き合った。

まさに、熱い兄弟愛である。

だが、しかし、その時に、ユウジは素朴な疑問を兄に投げかける。

「ねえ、兄ちゃん？」

「何だ、弟よ」

兄は、怪訝な顔つきで弟を見る。

「さつきから兄ちゃん、とってもいい匂いがするんだけど、一体なんの匂い？」

弟の、まだ幼さの残る表情に、兄はまるで何を感じるでもなく答えた。

「ああこれか。これはな、昼間に『シロクロ猫の宅配便』で届いた“ビスケット”の香りだ。なんだかあんまり旨くなかったな。時期外れにお歳暮とは呆れてものが言えん。差出人はかなりの常識外れなんだろう。あれ？ まだ匂ってるか？ やだなあ、この服今日おろしたてのおニューなんだぜ」

「……………」

兄タカノリの、あまりの傍若無人振りに、ユウジは言葉なくその場に崩れるように、ヘタリと倒れこんだのである。

それでも彼らは、血を分けた兄弟である。弟ユウジとて、兄の傍若無人振りに多少の免疫はある。

ユウジはめげずに、眼前の魔人兄の顔色を窺いつつ、

「それよりさ、兄ちゃん！ 今日ボク誕生日なんだぜ！ プレゼントないの？ …… あっ、ゴメン。兄ちゃん今失業中なんだよね。それ確か『ニート』っていうんだっけ？」

とそういつて、まだ幼さの残る少年特有の眼差しで話し掛けるのであった。

それを受けて兄タカノリは、まるで平然とした面持ちで、その質問に答えるのだ。「ハ、ハ、ハ、こいつは手厳しいや……。違うんだよユウジ。兄ちゃんはちょっと腐れ切った今の社会に嫌気が差して、自らお休みを貰っているだけなんだよ」

ユウジは、兄の、あまりに悪びれた風もない素振りに、妙な苛立ちを覚え、

「へえー、いいなあ大人って。ボクなんてまだ中学生だから休む時はママに言ってからじゃないとダメだもんなあ」

と、精一杯の悪意を含んだ嫌味というものを言ったものだ。

すると、兄タカノリは、弟の真意を知ってか知らずか、また、魔人言葉を放つのだ。

「ハ、ハ、ハ、ハッ！ ユウジも早く大人になれ。大人はいいぞ！」
兄の表情は真顔だった。

「……………」

当然、弟ユウジは崩れ落ちた。この日、二度目である。

「じゃあ、兄ちゃんにプレゼント期待するのはちよつと罪だよね」

しかし、ユウジはめげなかった。まだ、この魔人兄に立ち向かうのである。今どきの少年にしては、見上げた根性である。

が、しかし、

「何を言ってるんだユウジ！ この兄をバカにするなよ」

兄とて、引けを取るものではない。何せ、この男、これが普通なのである。並々ならぬ男、なのである。

とはいえ、弟ユウジとて、負けてばかりはいられない。彼はここぞとばかり、今まさに思いついた激しい攻撃の手をやめるつもりはないのである。

「じゃ、兄ちゃん。プレゼントあるの？」

弟ユウジは、激しい攻撃を放った

それは、夕暮れのゆつたりとした流れを、極寒のツンドラ地帯の猛吹雪に変えてしまうような勢いがあつた。稀に見る強烈な一撃である。

相手は無職である。しかも職歴はおろか、何一つ自ら給金を稼いだという記憶がない男なのである。失業中とは名ばかりで、汗水、

涙水を一粒たりとも、流した事ない男なのである。

通常の一般人であるならば、頭をもたげ、膝を付き、地獄の亡者のような呻き声を上げて転げまわるほどに、いたたまれなくなるものである。

がしかし……。

兄タカノリは、そうではなかった。どういう思考回路をしているのか定かではないが、まるでエサをもらう寸前の小鹿のように、意気揚々と丸い双眸^{そうほう}を潤ませながら、

「ああ、あるとも！……しかしな、先立つものがないのだ。だから行動で示してやったぞ！」

と、を返したものだ。どこからともなく、高原をゆるやかに駆け抜ける爽やかな風がユウジの頬をなでまわす。カッコウが啼いている。

ユウジは驚いた。愕然とした。どこにそんな自信あるというの？どこからそんな考えが湧いてくるの？そんな言葉が、彼の脳裏を過ぎる。

恐ろしいほどの兄の言動に、彼は身震いしたが、さすがに怖い物見たさも相まって、次を問いただすしかない。

「行動？」

そういつて、ユウジは切り出した。いや、そう切り出すしかなかったのだ。

すると兄は、これまでと同じように、当然の如く、満面の笑みで言い放つのだ。

「ああ。お前は以前から困っている事があるって言っていただろ。やっておいてやったぞ！」

兄は、ユウジの肩をぼんと叩いた。まるで邪氣が感じられない。

ユウジは恐る恐る……、

「う、うれしいな……。ところで何をやってくれたの？」

聞きたくはないが、聞いてみた。

それを受けて、兄タカノリは、まるで天下を取った武将のような

勢いで言い放ったものだ。

「ああ、お前がやりあぐねていた『ドラドラ・クエスト9』のドラドラの紋章見つけといた。ああ、ついでに完全クリアしてあげたぞ！ 喜べ！」

「……………」

ユウジは崩れ落ちた。この日、三度目である。そして彼は、二度と立ち上がることが出来なかったのである。

『凶』

悪のセオリー』 了

『グラスハートな彼女』（前書き）

ふざけた口調の地の文は、2008年の春に亡くなられた女優『
広川太一郎』さんをイメージして書いたものです。

広川さんをご存知の方は、そんなイメージで読んで頂けると、ボ
クちゃん幸せだったりなんかしちゃったりして。そゆのもいいんで
ないかい。

『グラスハートな彼女』

『グラスハートな彼女』

みんな、聞いてくれ！

俺はさ。今現在、大変な危機に陥っちゃってるわけ。

「一体どうやって、この危機から脱出来るのさ？」

なーんて、そればかり考えているところなだけでさ、まるでいい案が思い浮かばないわけなのよ。もう、まるでダメ男。

だから、これを読んでいるアンタたち！ 俺の力になってちょうだい！

ま、事情は、一から話さないと解からないだろうから、まずは、俺の身の上話から聞いてくれ！

そのくらい、いいだろ？

俺さ。最近この町に引っ越してきたばかりなだけでさ。すんごい良かったと思えることが、二つあるわけ。

先ず一つめは、俺のアパートの窓から海が見えること。

都心から列車に揺られて一時間半の物件なんだけど、これがすんごい良い所です。六畳一間のフローリングのアパートの窓から南の方角を覗き込んだりするとさ。緑色の芝生が一面に広がる、もうこれでもかってぐらい、だだっ広い『緑地公園』が見えてさ。その公園のもっと向こう側なんか覗き込んだら、もっともつと、だだっ広い壮大な大海原と水平線が待ち受けちゃっているわけ。な、な、すごいだろ。すごいだろ。

もう、なんつーの。すんごい贅沢？ すんごい幸せ？

ちよっと前まではさ、都心近くの密集地帯に、赤茶色の触覚の生えた小人たちがうようよ徘徊する小汚いアパートなんかを借りていたわけなだけでさ。ほら、なんて言っただけ？ あのカーネルナ

ントカおじさんが使うチキンの名前？ そうそう、そのブロイラーみたいな生活に飽き飽きしちゃってさ。そんでこっちの海側の、のびのびとした町に引越して来たってわけなのよ。

ちょこつと前まではさ。都会人気取りでさ。いろんな有名どころの街なんかを散策を試みたりしてさ。ほら、金色のうん みたいなオブリジェが乗っかってるビルとかがあるだろ？ あと“どぜう”とかいうによろした物を食わしてくれる、橋のたもとの古っぱい店とかあるだろ？ そんなふうに、あの街のあいつた店のメニューが旨いだとか御託を並べ立てちゃったりしていたわけなんだけどさ。もとをたどれば、俺もかなりの田舎者なんだよね。空気がまじー（マズイ）所になんかさ、そう長々といられないっつーの。もう都会人面してごまかして生きていくのはゴメンしたいわけなのよ。

そうそう。たまに携帯電話にかかってくる田舎の友達なんかに、「ヒルズってさあ、響きがいいよねえー」とかなんとか言ってみちゃったりしてたわけんだけどさ。過去の俺。

はずかしー！ アホかったの。ちゃらんぼらんな社会人の俺なんかにはまったく関係ないのにねえ。

そんな田舎育ちの俺がさ。海の見える郊外の町に引越して来たってわけ。うーん、もう最高なわけよ。

そして二つ目。

そう、この二つ目が大切なわけ。これがもつと最高！ ホント幸せな俺。

俺はこの郊外の町に引っ越してきて、ある女の子と知り合ったわけよ。おいおい、女の子って言っても女子大生だぜ。カン違いすんなよ、この犯罪者！ ^{ヘンタイ}このすつとこどつこい！

そう。つまりそういうこと。俺に飛びつきりの彼女が出来ちゃったってわけなのよ。これが。

そりゃあ、社会人二年生となったこの歳でさ。彼女が出来た事を、人生の一大事のようににはしゃぐのはみつともないんだけどさ。やっぱりこれが、俺にとつての一大事というわけなんだわな。

えっ？ なにがそんなに一大事かって？

それがね、手前味噌で申しわけないんだけどさ……その彼女、かなりのカワイコちゃんなわけ。もうすんげーかわいいの。

よく小説なんかのたとえで、『目の覚めるような美人』なんて言い回しがあるだろ。言っちゃあなんだけど、俺の彼女はそんなふうな言い方がズバズバ当てはまっちゃう、目の覚めるようなカワイコちゃんなわけ。

これ読んでる人、みんな小説とか好きなんだろ。だったら俺が書いたものを読んで聞かせるよ。

えっ？ 何をだって？

決まってるんだろ。詩だよ。詩。ポエム。彼女の素晴しさを称えるポエムのことだよ。賛美歌ともいうのかな？ 本物の賛美歌とかは歌ったことないけど。

えっ？ 何？ 今度でいい？

そうか。それは残念だな。結構自身あつたんだけどな。まあいいや。それは今度さ、コンビ二行くついでに直木賞にでも送つとくからさ。まあいいや。

とまあ、そんなことはおいといてさ。

前置きが長くなっただけさ。俺は今日、そんな可愛くって優しくてパーフェクトに近い彼女とデートの待ち合わせをしているわけよ。俺のアパートから五分ぐらい歩いた所にある、紅茶のおいしい喫茶店なんだけどさ。そうそう、店の前で茶トラ模様の猫が「いらっしや〜いにや〜ん」とか鳴いて出迎えてくれる店なんだけどさ。「いらっしや〜いにや〜ん」

だぜ。

ほら、アンタも想像してみなよ。すっごい可愛いだろ？ そんな感じでさ。かなりイカしてるだろ？

この選挙前の政治家みたいに、かなり愛想のいい猫の名前が、プクちゃんって言うんだけどさ。これがまた彼女のすごいお気に入りでさ。緑地公園でデートする時とかの待ち合わせ場所はいつもここ。このサテンってわけなの。まさに二人にとっての愛の招き猫っていうわけなのよ。

でもさ。そんな可愛くって心優しくってパーフェクトに近い彼女なわけなんだけどさ。ここだけの話、一つだけ欠点があるわけなのよ。

それはね

とっても傷つきやすいってこと。

わかるだろ。心のことだぜ。内面のことだぜ。うーん、ハートブレイク。つまりハート。ハートが無茶苦茶繊細なわけよ。もうシャパンングラスの端っこみたいにもろくてさ。彼氏の俺としてもすごい大変なわけよ。

この間もさ、俺のアパートに飯作りに来てくれたわけよ。むへへ。そうよ。もう俺たちはそういう関係なわけだけど……

彼女ってばさ、料理が得意でさ。その晩のメニューは和食中心だったわけ。

揚げ出し豆腐にきゅうりのお漬物。出し巻き卵に焼き魚。シジミの味噌汁。イカとねぎと若布の、ぬた和えなんかもあったっけ。あれはホントにうまかった。心までがとろけそうになったよ。

でもさ。俺が、つい口にしたあの一言がいけなかったわけなのさ

「本格的な出し巻き卵もいいけどさ。弁当とかに入ってる甘〜い卵焼きとかもおいしいよね」

とか、言っちゃったりしたらさ。彼女、突然立ち上がって南側の窓の方へ駆け出して行っちゃってさ。ベランダからピョーンってな感じで飛び降りちゃったってわけ。

そう、その通り。自殺だよ。自殺。何気ない一言に傷ついちゃっ

て、南側の窓から飛び出して、俺の目の前で、いきなり飛び降り自殺を図っちゃったってわけ。これがアンタ、驚かないでいられますかっての！

でもさ。彼女、全然怪我なくて無事だったわけ。えっ、なんで？ そりゃさ。俺の部屋が一階だからだよ。高さなんかぜんなかったの。アパートの目の前に広がってる、緑地公園の芝生の上に「デーン！」とかいっちゃったりして、単に寝そべっていたってわけ。まるで坂本竜馬の死に際みたいになさ、前のめりになって突っ伏した状態になっちゃったりしてさ。白いワンピースのスカートの部分が全部めくれ上がっちゃったりしてさ。お尻丸出し、なんてわけ。な、な、おかしいだろ？

でさ、彼女そのまんまの姿でしばらく恥ずかしくて動けなくなっちゃったのよ。ね、ね、可愛いだろ？

そんな感じでさ、付き合ってからさ、俺のマイスイート彼女ったら、傷つくたんびに自殺未遂を図っちゃったりしちゃうわけ。もうホント、大変なんだから。こっちは。

招き猫のプクちゃんの頭を撫でながら、その喫茶店に入るとき。そんなスイートな彼女が、俺の来るのを首を長くして待っていてくれちゃったりしてるわけなんだけどさ。今日も彼女は、飛びつきり可愛いわけなのよ。

もう薄桃色のセーターなんか着ちゃったりしてさ。髪を後頭部で一まとめにしちゃったりなんかしてさ。真ん丸い瞳なんかを、

「キラキラ」

とか、させちゃったりなんかしてさ。

「こっちよ」

とかなんとか、手を挙げてきちゃったりするわけよ。

うーん、ボクちゃんもう最高だわ！

でもさ。俺さ……

一つまずい事に気付いちやっただわな……

実はさ。こんなこと、他人に話すのもなんんだけどさ。今、ヒラヒラ、ヒラヒラ、とか揺れる物体を発見しちやっただな、これが。

え？ なにそれって？

ほら、よく教科書とかのえらい人の鼻の下辺りに、黒い鉛筆で一本線なんか引いちやったりしたことあんだろ？ 社会の授業が退屈で、なんとなくいたずら書きなんかしたことあんだろ？ あれだよあれ。

そんなこまかい黒い線のようなものが、彼女の可愛らしいお鼻の片方の穴から、ヒラヒラとか舞い踊っちゃったりしちやってるわけなのよ。

これがもう、飲み物なんかをストローで吸っちゃったりすると、余計に伸びて出てきちゃうわけなのよ。彼女の顔が可愛らしすぎるから、ひどく悲惨に見えてしまうわけなのよ。

もうホント、どうして鼻毛って急に伸びてくるものなのかしら。

ねえ、俺はこれからどうしたらいいと思う？

ねえ、俺はどうやってこの場面を切り抜けたらいいの？

これを読んいでるそのあなた！ あなたの意見を是非聞かせてちょうだい！

もう気分は、時間よ『とまれ！』ってな感じだよね。

『グラスハートな彼女』 了

『恩知らずでない猫』（前書き）

この物語は童話です。携帯用にと台詞のみで構成しました。

アザラシのモデルは『タマちゃん』。そして猫のオリヤくんのモデルは、もう十年前ぐらいに少ない休みを利用して当てのないロングドライブ（気ままな旅）をしていた時に出会った、河原の一匹の白い子猫です。

ひと気のない河原で友人と野宿していると、ひとなつっこく寄ってきて晩酌の相手をしてくれました。いたずらにビールを舐めさせたら、びっくりして他の酒瓶をひっくり返して飛んで逃げていったっけ。

でも、またけろつとした表情で戻ってきて。

だれも立ち寄らない閑散とした田舎町の河原での出来事。
そんな猫目線のシンプルな物語です。

『恩知らずでない猫』

童話『恩知らずでない猫』

はくちゅん！ ブルブルブル……。

オリヤはネコだにゃん。この河原に住むチビネコだにゃん。

なまえ？ なまえってにゃんだそれ。食べられるにゃん？

オリヤはいま、たべものを探してるにゃん。オリヤはいつでも腹ペコだにゃん。だまってたってだれも食べ物なんか運んでくれないにゃん。だから自分でさがすにゃん。

でも、食べ物なんてなかなか落ちてないにゃん。落ちてたって、カラスのクロ公達が持つて行ってしまうにゃん。せつかく“後ろ足で歩く生き物”がそこらじゅうにおいて行ってくれる食べ物も、かたっぱしから持つて行ってしまうにゃん。

ウゝ。お腹すいたにゃん。フラフラだにゃん……。

それにしても、最近やたらこの河原に“後ろ足で歩く生き物”が増えたにゃん。

きつと“アイツ”のせいだにゃん。

アイツはいつも川の中にいるにゃん。

水の中にいてよく平気だにゃん。

オリヤは水が苦手だからそんけいするにゃん。

だけどアイツいつも独りぼっちだにゃん。

さみしそудだにゃん。

あれっ？

そういえば、オリヤもそうだったにゃん。オリヤは気が付いたら独りぼっちだったにゃん。

でも、それが普通だから気にしてないにゃん。

淋しくなんてないにゃん……。

……でも“アイツ”はいつも淋しそудだにゃん。

川の中からいつもこつちを見ているにゃん

“後ろ足で歩く生き物”はアイツがかなしそうな顔をしてこつちを見ると、みんなよろこぶにゃん。

“後ろ足で歩く生き物”は日増しにどんどん増えていくにゃん。

おかげでオリヤはたべものが食べられるようになったにゃん。

きつとアイツのおかげだにゃん。

これなら腹ペコにならないにゃん。

カンシヤだにゃん……。

うにゃ？ にゃあー！ にゃあー！！ にゃにするだにゃん！

「ウフフ……こんにちは、カワイイ猫ちゃん」

うにゃー！ にゃにするにゃん！ はなせにゃん！ ふ、不覚だにゃん……。 “後ろ足で歩く生き物”に捕まってしまったにゃん……。

「あらあら、そんなに暴れないで……。大丈夫よ、大丈夫。なでなでしてあげるから」

うにゃあ？ そうなのにゃん？ ホントにダイジョウブなのにゃん？ 信用できないにゃん……。オリヤを取って食べたりしないのにゃん？

「大丈夫よ、食べたりしないから」

にゃん？ おまえ、オリヤのことばが分かるにゃん？

「いいえ、分からないわよ。でもなんとなく分かるのよ。猫ちゃん」

にゃんだあ？ 変なやつだにゃあ。でも……おまえいいニオイがするにゃん。にゃんだかなつかしいニオイがするだにゃん。ネムネムだ……にゃん。

「あらあら、よっぽどおねむだったのね。気持ちよさそう……」

ゴロゴロ……ゴロゴロ……にゃん。

「おーい！ 悠里！ 悠里ったらー！ もうつどこ行っちゃったのかと思ったわよ。なあにい？ その薄汚れた猫……。やだあ悠里ったら、また猫なんか相手しちゃってさ。もうっ！ 今日はこっちじゃないでしょ。わざわざこんな所まで足を運んで来たんだから、猫なんて放っておいてあっち見に行こうよう！」

「あらあら、渚ちゃん。もう少しだけいさせてくれる？」

「もうっ！ もうっ！ 悠里ったらー！ 猫なんてどこにでもいるじゃない！ほんとマイペースなんだから！」

にゃにゃ……？ うにゃーん？ にゃんだか騒がしいにゃん。おいおまえ、どうしたのにゃん？

「なんでもないわよ、猫ちゃん……。あつ、そうだ。猫ちゃんお腹すいてる？ 今ね、えびせん持つてるの。たべる？」

にゃにゃっ！！ この香ばしいニオイは……えびせんにゃあん！
！ オリヤの好物だにゃん！

「さあ、どうぞ。たと食べてね」

うにゃーん。それではいただくにゃん。ハグッ……あれっ？ にゃんだこれ？ カリカリするにゃん。えびせんてふにゃふにゃするものじゃにゃいの？

でもいいにゃん。こっちの方がおいしいにゃん！ いくらでもた

べられるにゃん。やめられにゃい……とまらにゃいにゃん。

「あらあら、そんなに慌てて食べなくてもまだ沢山あるわよ。猫ちゃん」

「ねえ、ねえ、悠里ったら！ そろそろ行こうよ。もう日が暮れるから、見られなくなっちゃうよ！」

「ハイハイ、渚ちゃん分かっていますよ。……それじゃあね猫ちゃん、私行かなくちゃ。あなたを連れて帰りたいけど、事情があつてどうしても連れて帰れないの。ゴメンね……、またね」

にゃあーん、にゃあーん。もう行っちゃうのにゃ？ もう少しここにいろにゃん！ オリヤはおまえが気に入ったのにゃん。だからいるのにゃん。

「あらあら……、ゴメンね……。またえびせん持って来るからね……」

「ねえ、悠里い！ 早く早くうー！」

にゃあーん！ にゃあーん！

「またね……猫ちゃん」

にゃあ……。行っちゃったにゃん。さみしいのにゃん……。

でも、これでよしとするにゃん！ だってえびせん沢山食べられたにゃん。

きつとこれもアイツのおかげだにゃん。カンシャするだにゃん。

そうにゃ！ アイツにアイサツがてらにお礼を言ってくるにゃん。
でも……

でも、オリヤは水の中には入れないし……。 “後ろ足で歩く生き物” がいっぱいいて、川の側には近づけないにゃん。

にゃんだ！ そうなのにゃ！ 夜中行けばいいにゃん。夜中なら “後ろ足で歩く生き物” もいないにゃん。

それまで寝るにゃん。うにゃうにゃ……ねておくにゃん……。

うにゃ？ うにゃ？ ……辺りが暗いにゃん。……そうにゃ、夜だにゃん。オリヤの時間だにゃん。

にゃんだっけ？ にゃにかすることあったようにゃ……。

そうにゃ！！ アイツにお礼を言いに行くにゃん！

あれっ？

にゃんだか川の方が騒がしいにゃん。

にゃにゃ！！ にゃんでこんな時間まで “後ろ足で歩く生き物” が沢山いるにゃん！！ これでは川に近寄れないにゃん！！

「おーい！ 見つかったか！？」

「ダメだ！ そっちは!？」

「こっちもだ！ ……くそうつ。せっかく一般視聴者が喜びそうないいいネタだったのに……。どこへ消えちまったんだ」

た、た、た、大変にゃん!! アイツが“後ろ足で歩く生き物”に狙われてるにゃん!! このままじゃアイツ食べられてしまうにゃん!!

いそがにゃいと! アイツを見つけて知らせてあげるにゃん!

水は恐いんにゃけど、そうも言ってられにゃいにゃん!それが仁義というものだにゃん!!

ハア……ハア……ハア……やっと川に着いたにゃん。この辺にやら“後ろ足で歩く生き物”がいにゃいにゃん。

アイツいるかにゃあ?

えーと……。にゃんて呼んだらいいにゃん? まあ、適当に呼ぶにゃん。

おーい! いつも水の中にいる、さみしんぼの独りぼっちくんにゃーい! いるかのにゃあ! いたら出て来るのにゃん! オリヤ、お前にお礼が言いたいにゃん!

……………。

ここにはいにゃいみたいにゃん。あっち探してみるにゃん……………。

にゃ……？ にゃ！ にゃああああっー！！

「よ、呼んだべさ？ チビネコくん。……な、なんだべさ。ボクに何か用だべさ？」

にゃはあー！ ハアハアハア……。イキナリ水の中から出てくるにゃ！ にゃん！ びっくりしたにゃー、もう！

「だって君がボクを呼んだべさ」

にゃにゃ……、そうにやった。じつは話があるのにゃ。まずはお礼からだにゃ。オリヤはおまえのおかげで大好物のえびせんを沢山食べられたのにゃん。ありがとうなのになん。

「なんだか分からないけど、どういたしましてだべさ。見かけによらず君って礼儀正しいんだね。ボクはアザラシのプー太。よろしくだべさ」

プー太くんになん。初めましてなのになん。でもオリヤは知っていたのになん。

「チビネコくん、君の名前は？」

オリヤか？ オリヤにはなまえなんてにゃいにゃん。オリヤはいつも一匹ネコだになん。

「そうか、名前がないのか。それじゃボクが付けてあげるべさ。そうだ！ 『オリヤ』君てのはどう？」

にやにや！ にやんだかヒネリがにやいけど……いいにや！
それもらつにや！

「へへっ！ 気に入ってもらえたべさ。お近づきのしるしだべさ」

にやにや、オリヤとプー太くんは今日から友達にやのにや。

「……友達かあ。オリヤくん。とても言いにくいんだけど、ボク今日でここをお別れするだべさ」

にや、にやんだって？！

「だってボク、おかあさんの所へ帰りたいんだもの。ボク迷子なんだ」

そうなのにな……。せつかく友達にやったのに。

「ごめんよ、オリヤくん。ボク、くつたらどこ、いられないべさ。水は臭いし、たべものはいないし。おまけに人間がボクをいじめるから……」

にんげん？ もしかして“後ろ足で歩く生き物”の事にやか？

……そ、そうにな……！ こうしてはいられにやいにや！ ニンゲンとやらがプー太くんを探してるにやん！ 見つかったら食べられてしまつにやん……！

「そ、そんなあ……。ボク何も悪い事してないべさ。何でいじめるべさ。……しかたないべさ、今晚旅に出るべさ！」

そ、そうするにやん！ さみしいけどそれが一番にやん！

「う、うん。ボクも君と出会えて嬉しかったべき。オリヤくんの事、忘れないべき」

うれしい事言ってくれるにゃん。オリヤもプー太くんを忘れないにゃん！それが友達だにゃん！

「うん！ずっと友達だべき！」

うにゃー！！ずっと友達だにゃん！！

……にゃにゃ？！誰か来るにゃん！きつとニンゲンだにゃん！早く行くのにゃん！捕まったらおしまいなのにゃん！

「う、うん。でも……」

いいから行くのにゃん！ニンゲンはオリヤが引き付けておくのにゃん！

「オリヤくん、ありがとう！またどこかで会えるだべか？！」

分からにゃいにゃん！でもオリヤたちはずっと友達なのにゃん！！

き、来たにゃん！早くだにゃん！プー太くん、元気で行ってらっしゃいなのにゃん。おかあさんに無事に会えるといいのにゃん！！

「おい！いたぞ、こっちだ！アザラシがいるぞ！」

じゃあバイバイなのじゃん！

「うん、オリヤくんも元気でね。バイバイ……」

行っちゃったのにじゃん……。あとはニンゲンを引き付けるにじゃん！
行くだにじゃん！ それっ！

シャアーーーーッ！！

「わっ！！ 何だっ！！ ネコがあっ！ ネコがあ！ 襲ってきたあー！！」

「わーっ、機材があ！ た、た、た、大切な機材が荒らされているう！ わ、わ、わ、大切なディスクを噛み付いて持って行きやがった！！」

「捕まえるーっ！ 取り返せーっ！！」

「まてえーっ！！ このドロボウネコー！！」

ハア、ハア、ハア……なのじゃん。

ニンゲンとやらはなんとかまいたのにじゃん…。

プー太くん、無事におかあさんに会えるといいにじゃん……

うにゃ。きつと会えるにゃん。

疲れたにゃん。オリヤはまたねるにゃん。

おやすみなさいなのになん……。

さむいさむい日がいくつもこえたにゃん。

プー太くんは元気にしてるかにゃん。

オリヤはあいかわらず、河原のさんぽだにゃん。

そういえばオリヤのさんぽ道に、プー太くんそっくりの固いやつ
がいるにゃん。

そいつは話しかけても返事をしないにゃん。

でも、プー太くんにそっくりだからいつも近くで昼ねをするにゃ
ん。

とっても気持ちがいいのにゃん。

まるでプー太くんというみたいだにゃん。

うにゃうにゃ……

にゃああああーっ！！ にゃにするにゃん！ はなせにゃん！
ふ、不覚だにゃん！！ またニンゲンに捕まってしまったにゃん
！！

「こんにちはカワイイ猫ちゃん。あらあら、そんなに暴れないで。
なでなでしてあげるから……」

にゃにゃ？ にゃんだかい二オイがするにゃん。なつかしい二
オイだにゃん。むにゃむにゃだにゃん……

「あらあら、猫ちゃん。ねむいの？ せっかくえびせん持って来た
のに……」

にゃにゃ！！ にゃんと！ えびせんもってきたのにゃ？！ 早
く言うのにゃ！

「あらあら、そんなに慌てないで。沢山あるからたと食べてね」

うにゃ、そうするにゃ。

うにゃ？

でもものすごく眠いのにゃ……。きもちいいのにゃ……………。

「おーい！ 悠里い……ハア、ハア、ハア……もうっ！ どこに行
っちゃったのか心配したわよ！ すぐいなくなるんだから！」

「あらあら、ごめんなさい渚ちゃん」

「ねえ、ところでさ。こんなとこで何やってんの？……あら？
なつかしいっ！！これアザラシのママちゃんのお墓じゃない！
！へえー、こんなとこにあったんだ。それよりさ、五年ぶりに会
ったんだから再開を祝して美味しいケーキバイキングでも食べに行
こうよ。この辺にお勧めのカフェ見つけたんだ」

「あらあら……。渚ちゃんは食いしん坊さんね」

「ほら、早くう！悠里い！こんなアザラシのお墓しかない所で
えびせんなんか広げてないでさあ」

「ハイハイ……。じゃあね、猫ちゃん……。お友達といつまでも仲
良くね……。それじゃあね……。バイバイ」

「うにゃ。バイバイなのにな……。オリヤはもうプー太くんと、ず
っといっしょなのにな……」。

終

『このはしわたるべからず』

『このはしわたるべからず』

とんち小坊主はしばし首をひねったが、何事の不安も感じずに、その橋のど真ん中に足を踏み入れ、歩みを進めるのだった。

されど、道のど真ん中ほど風当たりの激しいものはなかった。が、それでも小坊主は時に駆け抜け、時には悠々と大手を振ってその志しを貫いた。

しかし、彼がどんなにそこを堂々と歩み進もうとも、誰もが何かを恐れるように歩み寄ろうとはしなかった。

なぜならば、右手側の欄干らんかんを歩く人から見れば、小坊主は左側を歩むように見え、

また、左手側の欄干に沿って歩く人から見れば、小坊主が右側を歩むように見えていたからだ。

人は二つの目を持っている。がしかし、一つの物事を見るので精一杯なのだ、と彼は理解した。

小坊主はほとほと困り果て、途中で着ているものを放り投げると、橋を渡らずに川へと飛び込んだ。

川の流れに逆らいながら、ゆっくりと、ゆっくりと水の冷たさを実感し、向こう岸に辿り着こうと決心したのだ。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1808e/>

短編集『ぬかにクギは打てない』

2011年10月3日17時40分発行